

効果的に情報収集をし、 活用する学習活動

「。。博士への原稿依頼」

～六年（下）「外来語と日本文化」～

広島大学附属小学校

原 正寛
はら まさひろ

一 情報活用能力を育てる上でのクラスの実態

児童が学校で資料収集をする場所はパソコン室と図書室が中心である。アンケートの結果では、特にパソコン室を利用する児童が多い。その理由を挙げてみよう。

- ・ いろいろな方面からの豊富な資料
 - ・ 便利・手軽
 - ・ 友達と同じ画面で調査できる。
 - ・ 内容をどんどん発展させることができる。
 - ・ 最新情報を発見できる。
 - ・ 資料を偶然発見することがある。など
- 反面、課題もある。特に、検索する内容がはつきりしていない、曖昧、何となくといったときに問題点も多い。
- ・ 期待していたことと全然違った内容が出てくる。

二 説明的文章教材でつけてきた力

私は児童に、国語科を学習する際、説明的文章教材と文学的文章教材の学習は意識して区別して取り組むように指導してきた。同じ文章でも学習する意図はまったく違う。視点や発言する内容も当然違う。特に説明的文章では、あえて形式を中心に学習する姿勢で取り組んできた。筆者は読者を要旨にたどり着かせるために、文章構成・表現のうえでどのような工夫をしているのか、読者（児童）を中心に筆者を評価するという読みである。そのうえで、自らも研究発表やディベート学習では、発表や立論の原稿を書き、その文章構成や表現方法などに対して友達の評価も受けてきた。そこでは、調べたことを自分が理解し、納得していないと相手には絶対伝わらないことを実感し、形式主義中心だった学習から内容の理解を深めるために積極的な読みが生まれてきた。特に資料を読み取る際は、文章で書かれた内容は当然ながら数字やグラフも自分の言葉にして相手に伝えることを常に意識し始めた。

そこで、この単元では、「説明文を書く」ことで情報収集、取捨選択、活用まで含んだ学習活動を組んだ。

- ・ 大量の資料が出てくる。
- ・ いろいろな内容のものが出てくる。
- ・ 絞りすぎると出てこない。
- ・ ただ時間が過ぎる。
- ・ 時間がない。など

確かにパソコンを使った情報収集は便利でスマートな感じではあるが、国語を正確に理解し、適切に表現する能力の育成を旨とすることを学習の中心とする国語科教育の立場からすれば、探し出した情報をいかに読み取り次の活動に活用できるか、すなわち情報をいかに効果的に理解し、それをもとに自分の考えを練り、発信できるかが中心課題となる。特に内容を理解するという読み取りの力はまさに国語科でつけるべき基本の学力である。その学力なしでは、大量の資料は集まったが、すべてを読み取れないだけでなく、絞り込めず取捨選択が困難になる、自分が何を調べたいのか分からなくなる、などの課題をもつ児童も多い。このような難問を国語科の授業で解決していくために、目的に応じた情報収集、その内容の理解、そしてその情報を自分のものとして活用する学習活動を仕組みたい。

三 「。。博士への原稿依頼」～外来語と日本文化～

情報の内容は自分の仮説を証明する事例である。同じテーマでも筆者の仮説次第で並ぶ事例は変わってくる。説明文や意見文などを書くときには、意見や主張の根拠として身近な事例を挙げることが効果的である。これが論理的思考力や表現力の基本である。一人ひとり興味ある視点からテーマを分析し、その情報を集めることで、個性豊かな説明文が完成すると考えた。その興味あることを自ら専門家となり「。。博士」と称して原稿を書く設定だ。そこで専門家として収集した多くの情報の中から効果的な情報を取捨選択して書く。そのためその説明文には二つの条件をつけた。

・ 題名は「外来語と日本文化」とする。

児童にとって予想外のテーマである。多くは歴史学習や身近な生活面へと向かう。もちろん、教材文「外来語と日本文化」（渡辺実）の内容は知らない。単元の後半で自ら書いた説明文と渡辺氏の説明文を比較する学習へと発展することになる。

・ 原稿用紙の枚数は二枚半ぴったりとする。

二枚半としたのは、児童の実態から無理のない量であり、集めた資料をすべて使うのではなく、ある程度取捨選択する必要がある量だからである。



四 単元の実際

学習活動 言葉を定義する

定義とは、「ある物事の意味をはっきり決めて述べること」と知らせ、「外来語」と「日本文化」という言葉の意味を辞書で調べるのではなく、自分で意味を決めるよう指示した。この学習で説明文の方向性が決まってくる。

学習活動 外来語と日本文化の関係を考える

外来語と日本文化を自分なりに関係づける。ここで考えられる関係づけが仮説となり、要旨にもつながっていく。この仮説を証明するために事例を探し、要旨へとつなげる説明文の「なか」が組み立てられていく。この時点で情報収集の範囲も狭まる。以下に、子どもが考えた関係を示す。

- ・ 日本が豊かになり、外国から色々な物を吸収することによって外来語も入ってきた。つまり外来語が増えていくことは日本と外国の交流も増えているということであり、近代化につながる。
- ・ 外来語とともに日本は豊かになるが、日本に元からあるものや言葉も日本を豊かにしたりなごませてくれたりするから、どちらも大切にしていくなさ。
- ・ 外来語と日本文化の関係は歴史に大きく関係してく

果的な事例を取捨選択することがこの学習の中心となる。

学習活動 自分が書いた説明文を評価する

既習事項をもとに自分の学習を振り返らせることが必要だ。ここでは自分の説明文を具体的に評価させた。

- ・ 書きだしの印象が弱い。
- ・ 接続語は意識したので文章全体の流れはよい。
- ・ 事例が相手を納得させるには弱い。
- ・ 事例とまとめの文章の量がアンバランス。
- ・ キーワードを文章に多く使った。
- ・ 文末表現を意識した。
- ・ 資料をつまく選び切れていない。
- ・ 取捨選択で迷った。
- ・ 問題提起の書きだしがうまく書けた。
- ・ 今まで書いた作文中ベスト！
- ・ 達成感があった。
- ・ 「思う」が多くて文章に自信がなさそう。など

学習活動 説明文を書く

既習の文例から、問題提起か話題提供を用いて仮説へつなげる導入部分を書き始める。「なか」の部分は、仮説を証明するための事例を枚数制限の関係から二、三例に選択する。仮説から要旨、また題名へとつなげるための効





「はじめ・なか・おわり」で始まる文章には引きつけられた。 なども、

・自分も指定されたが読みたくなるような題ではない。
・自分と比べて接続語が少ない。

「ふつつ」という言葉がたくさん出てくるが、「ふつつ」の基準は？

・「外来語の例」という表が使えた渡辺さんは有利だ。
・事例を表にしたかった。

・事例は身近なものが効果的と学習したが、渡辺さんの三つの事例は本当に身近だったのか？

・「はじめ」の部分が長すぎないか。
・カード・カルタ・カルテの説明の順番に意味があるのか。「なか」では歴史順だが…。 など

「はじめ・なか・おわり」を意識的に評価の対象として読んだり、登場する言葉にこだわったりして、批判というよりは、形式面だけでなく内容面にも目を向けた積極的な読みができたと感じた。

五 単元を終えて

発展学習として調べ学習をすることは、内容を理解したうえで、意欲的に情報収集をしたり情報を活用したりする力をつけるための大切な学習活動の一つであること

読み手に思いが伝わる工夫をしようと努力している。今までの説明的文章教材での学習が生きていると感心した。

学習活動 教材「外来語と日本文化」(渡辺実)を評価する

自ら考えた仮説を事実の情報で固めた説明文を書く学習をしているので、論理的であることから内容にも自信をもっている。したがって読み手の立場としても、渡辺氏の工夫を素直に評価し、批判もできる。自分の文章と渡辺氏の文章を比較しながらの積極的な読みができたのだ。

- ・倒置法で強調している。
- ・文末表現で意見に自信を感じる。
- ・強い姿勢で納得させられる。
- ・接続語の使い方がうまい。
- ・資料が具体的にうまく使っている。
- ・カード・カルタ・カルテの事例は身近だ。
- ・はじめ・なか・おわりの構成が分かりやすいので読みやすい。

「人類の心と暮らしを豊かにする」というのはまさしく辞書にあった文化の意味だったので感心し感動した。

は確かだ。今回提案した「先に説明文を書く」学習は、「題名読み」の学習に似ている。「題名読み」は、発展学習同様、教材文の内容に興味・関心をもって読むこととする内容面への影響が大きい。それに対して今回の学習は、文章を比較する形式面への影響が大きい。筆者の「外来語」と「日本文化」の関係づけに比べて、自分の関係づけの視点は、事例の効力は、単に単語が並べられた題名だが要旨と題名とのつながりはなどと、説明的文章を科学的見地から分析、比較ができる。自ら説明文を書き、意見をしっかりとったという事実と自信とで読み比べや積極的な評価や批判もできる。このような情報を活用する積極的な読みの学習活動は、主体的に創造する読みの力や、次に発信していく能力や態度面、そして他人の文章を評価する観点も育てることにつながると考える。

身につけた確かな情報活用能力を実際の場合で発揮できることが国語科の学習指導においても大きな目標の一つである。そのためには、指導のねらいを明確にし、一人ひとりの児童が効果的に読むことができるような学習活動を工夫することが大切だ。このような学習の工夫を評価し認知した児童は、豊かな言語生活力を身につけていく。